

令和4年 年末のトロール漁におけるワカサギ資源保護の取組について
(霞ヶ浦地区)

茨城県水産試験場内水面支場
茨城県霞ヶ浦北浦水産事務所

(取組の経緯)

- ・ 霞ヶ浦地区では、近年ワカサギ資源が減少傾向にあることから、令和4年11月7日に漁業関係者により資源利用について協議する資源利用協議会を6年ぶりに開催しました(写真1)。協議により、ワカサギ親魚を保護するためトロール漁(わかさぎ・しらうおひき網漁業)において、11月21日から12月31日までの間、ワカサギの遊泳層となる底層曳き(着底曳き)を自粛し、ワカサギを獲り控える初の試みが行われました。



写真1 資源利用協議会の様子

(取組によるワカサギの入網状況)

- ・ 当該期間中は、主にシラウオを狙った操業が行われ、獲れ具合に応じて、水面近くを曳網する表層曳き(浮かし)と漁網の浮力を調整し中層を曳網する中層曳き(沈み)の2種類の操業が行われました。ワカサギはその際に混獲される状況でした(写真2)。
- ・ 操業日誌調査(計14隻)の結果から、各々の操業回数は、表層曳きが全体の56%(138回)、中層曳きが44%(107回)でした。
- ・ ワカサギの入網量は、表層曳きが0.9kg/隻・時、中層曳きが3.0kg/隻・時と表層曳きでは、中層曳きに比較しワカサギが獲れる量が1/3と獲り控えの効果が大きいことが分かりました。また、当該期間中主な漁獲対象となったシラウオについては、表層曳き20.8kg/隻・時、中層曳き19.8kg/隻・時と差がほとんどなく、表層から中層まで広く分布し漁獲されました。



写真2 シラウオに混獲されたワカサギ

(ワカサギ獲り控えの効果)

- ・ 操業日誌を基に今回の取組の効果を試算すると、約4.5トンものワカサギが獲り控えられたものと推定されました。また、過去の調査結果から、12月の親資源の量は翌年7月のワカサギ資源に約3.5倍(重量)となって添加されると考えられ、今回の獲り控え4.5トンは翌年7月の資源に約16トンのプラス効果となるものと考えられます。
- ・ 一方で、12月のワカサギ親魚の指数(CPUE)は、2.8kg/時間・隻と残念ながら前年を下回り、平成25年以降最低の水準となったことから(図1, 2)、まだまだ低水準であり、今後すぐに大幅な資源の増加が期待できる状況にはないことから、ワカサギ資源の持続的利用のためには、次年以降も引き続き今回のような取組を継続するとともに、表層曳の割合を増やすなどの工夫をすることでより大きな効果が期待できるものと考えられました。

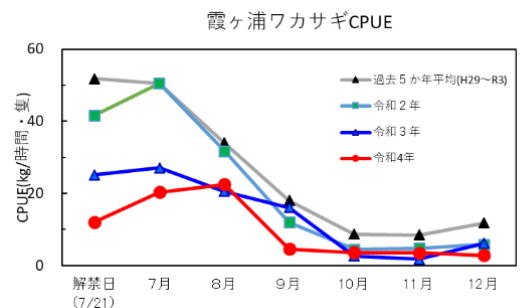


図1 霞ヶ浦ワカサギCPUEの月推移

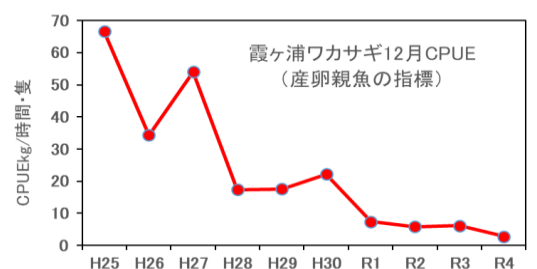


図2 12月のワカサギ親資源指標値の推移